

古代遺跡 *Megalith Shrines in Ancient Society*
—— いわくら 〈磐座〉 1号 2000

巻頭言	1
NPO 古代遺跡研究所・設立の趣旨	2
南米ペルーと日本にみる太陽崇拜の古代遺跡について Comparative Study of Megalith Shrines for Sun-Worship in Ancient Japan and Peru with regard to Iwakuras in Japan and The Machu Picchu in Pre-Inka Era	5

NPO 古代遺跡研究所
Institution for Research & Preservation
of Ancient Megalith Shrines
第1号 2000年8月, Japan

「祈り」は、人間に独特の行為です。「祈りへの依存は、生産力が低いほど高く、また天変地異などの危機が接近するにつれて高くなりま

もの全てのものに、自然の恵み豊かならんことを祈ったのです。その対象はシンボリックには太陽ですが、月も風も雨も星も大宇宙に満ち満ちているすべてのエネルギーを崇拝したのです。ここに大宇宙に向かって生きていた縄文人の世界観が伺えます。しかも彼らは、人間以外の存在を差別せず、かえってその精神を尊んだのです。このなかからあの素晴らしい創造力に富んだ縄文土器が生まれたのでした。



NPO (特定非営利活動法人) 古代遺跡研究所

所長 中島 和子

卒業 同志社大学 法学博士
専攻 政治学
職 桜美林大学 教授

「古代における政治と文化」をテーマに大陸先住民の文化を研究

1985年：九州山見古祭場を結成して現在

1990年：六甲山守る会を創設

1999年7月 NPO 古代遺跡研究所が認可となる

のように高く大きな祭場を建てたのです。エジプトや中南米のピラミッド、英国のストーン・ヘンジ、フランスのカルナク列石、ケルト人の巨石文化の遺跡など世界各地に残っています。日本では この祭場を磐座(いわくら)・磐境(いわさか)と呼んでいます。そこで人々が祈ったことは、現代のようにマイ・ホーム、マイ・マニー、マイ・カーといった私有財産の安泰と繁栄ではなく、この地上に生きとし生きる

その後 磐座はどうなったのでしょうか。ずっと後世になって、日本では神社を木材で建てるようになると、人々は住まいの近くに里宮を建て、山上の磐座を忘れてしまったのです。奈良の大神(みわ)神社のように磐座のある山と神社が隣接している場合を除いて、現在その数全国に十万と言われている神社の大方は、両者が離れており、元宮である磐座は忘れ去られたのです。一方、磐座は文化財に指定されるこ

とが少ないため、ゴルフ場や会社の寮の建設など山上の開発が進むにつれて破壊されることの多いのが現状です。

全国の展望の良い中心的な山の上には殆ど磐座の跡が見られません。それは、岩門や各種の列石、動物や方向石、日本独自の三種の神器を象どった岩、なかには当時の星座を残した天文石などに囲まれています。その意味はこれを築いた縄文人の世界観によってのみ正しく知ることが可能です。そのために古事記を、書かれています。漢字を排して、もとの日本語の意味によって解釈し直すことも必要です。

この研究所は、山野に放置されまたは無理解な土地所有者によって破壊の危機にある磐座を救出し、所属の研究者を中心に市民ボランティアの参加を得て、これらを測量・調査して世に出し、修復・復元すること、さらに貴重な歴史的な文化財として公の機関が保護するよう進言することを目的としています。

磐座を守り、磐座を建てた縄文人の世界観を知ることは、国境なき未来社会を構想するためにも不可欠です。過去に学んで未来を拓こうではありませんか。

あなたのご参加を待っています。

NPO (特定非営利活動法人) 古代遺跡研究所 郵便振込：00930-6-14379
Institution for Research & Preservation of Megalith Shrines in Ancient Society
〒662-0895 兵庫県西宮市上ヶ原五番町3-27 Tel 0798-51-7331 Fax 0798-51-9520

NPO 古代遺跡研究所・設立の趣旨

1 趣 旨

本研究所は、所属の研究者を中核としながら、山野に埋もれていて未だ学術調査の手の及ばぬ古代遺跡を、市民多数のボランティア活動によって探査し、それを取り巻く環境とともに整備し、古代人の世界観や生活を実地に研究し、必要に応じて専門家に依頼して測量・調査を行い、または不特定多数の市民を対象に講演または出版活動を行って、わが国の貴重なる古代文化を研究・保護することを目的とする。具体的には、九州と六甲山・甲山周辺の森林公園に埋もれている磐座（いわくら）や磐境（いわさか）と呼ばれている遺跡を挙げるができる。これらは縄文早創期以前に巨石をもって築かれた太陽崇拜の祭祀遺跡で、外国では、メンヒル、ドルメンと呼ばれ、英国のストーン・ヘンジやフランスのカルナク列石、ケルト人の残した巨石文化も同系である。日本では、すでに、ゴルフ場や会社の寮またはレクリエーション設備の建設によって破壊されてはいるが、いま残存するものを市民の自発的自律的活動によって探査・研究し、それらの保存に必要なことを行うのを目的とする。これらの遺跡は祭祀遺跡であるが、これを調査し、歴史的文化遺産として保護せんとする当研究所の行為は、宗教的行為ではなく、いかなる宗教や政党にも無縁の学術的・文化的行為である。

このたび NPOによる法人化を希望する理由は下記の通りである。

- 1) 研究所のあるべき姿として、研究所とその研究成果が私物化されることを防ぎたい。
- 2) 研究の継続性を確保したい。すなわち創立者の死亡によって研究が中断されない。
- 3) 経済援助としての寄付や助成金また研究補助金などを受けやすい組織形態にしたい。
- 4) 税制上の軽減処置を受けたい。
- 5) 社会的信用を高めたい。（研究には内外の学際的研究者を集め、磐座の保護・整備については多数の市民の参加を得たい。）
- 6) 地方公共団体からみても信頼のある組織でありたい。単なる研究の発表に止まらず、磐座（いわくら）が日本の歴史的文化遺産として公的機関によって保護されることを進言し、市民と研究者の自発的自律的団体として、その実現のための協力団体となることを希望している。

2 申請に至るまでの経過

当研究所の先駆をなすものは、二つの磐座（いわくら）保存会活動である。一つは、九州山地の主峰・国見岳山頂の古代祭場をめぐる“国見岳の神籬（ひもろぎ）保存会”であり、他は“六甲山・甲山周辺の古代祭場を守る会”である。当研究所の理事兼主要研究員たる中西旭（中央大学名誉教授）と中島和子（京都精華大学教授）は、九州では昭和60年以来今日にいたるまで九州山地の主峰・国見岳をはじめ、阿蘇山の北に位置する押戸石遺跡、拝み石遺跡やえびの市郊外の笠石遺跡を調査し講演や現地案内を通して地元市民への社会教育活動を行ってきた。その一端を示すものとして、毎年11月に国見岳山頂（1739m）で遺跡祭りを主催して1998年で第10回になるが、最近では参加者が増えて九州各地および近畿地方から160人を越える参加者が集まっている。資料(6)(8)(9)

他方、平成2年に、中島和子が西宮市に転居したことを機に、六甲山および甲山周辺の磐座（三国岩遺跡と天の穂日の岩遺跡、芦屋市奥池の剣岩および六麓荘のやたの鏡岩遺跡それに甲山周辺の森林公園内の磐座）を対象に保存会を作り、講演や新聞紙上の訴えを読んで集った市民を現地に案内し、市民参加の磐座の探査・研究を続けて今日に至った。

平成11年4月以降中島和子は、当研究所の運営・活動に専念することとなった。またこの数年、京阪神地区から集まった市民のなかには磐座探査の経験を重ねた結果、研究所の所員として積極的に参加する市民ボランティアも充分育ったので、このたび、文化の振興を目的とする非営利活動法人として、古代遺跡研究所の設立を申請するに至った次第である。

年 表

昭和60年 “国見岳の神籬（ひもろぎ）保存会”を結成。会長は井伊玄太郎（早稲田大学名誉教授）、事務局長に中島和子（当時桜美林大学教授）、学者文化人、地元の関連町村長・指導者を含む。

資料(1)

昭和62年 中西旭（中央大学名誉教授）の調査により、国見岳遺跡の対峙する二つの山形の磐座は太陽崇拜の古代祭場であり、その建築様式は伊勢神社のそのの原型をなすとの結論を得る。資料(2)

昭和62年 中西旭、中島和子、阿蘇の北部押戸石遺跡を調査、その結果、南小国町ではこれを町指定の文化財として保護することになった。

昭和63年 宮崎県えびの市郊外に笠石を中心に一連の磐座を発見、講演や現地案内により地元の営林署および地元の史談会や市民を啓蒙して今日に至る。資料(3)(4)

- 平成3年 国見岳遺跡に、天の北極の星座が組み込まれているのを発見す。資料(5)(6)
- 平成4年 中島和子、六甲および甲山周辺の磐座の探査を始め、多数の市民参加を得て“六甲および甲山周辺の古代祭場を守る会”を作る。
- 平成4年 国見岳遺跡に神社の宮柱跡を発見、発掘調査を行う。資料(7)
- 平成7年 阪神大震災によって西宮市越木町のこしき岩遺跡が破損されているのを発見し朝日新聞紙上で早期の修復を訴える。資料(10)
- 平成10年 国見岳の神籬保存会長・井伊玄太郎の帰幽により、中西旭が会長となる。

参考資料

- 資料(1) 宮崎日日新聞「国見岳に巨石信仰跡、学者・地元で保存の動き」平成元年11月2日
- 資料(2) 中西旭著「国見岳の磐座についての所見」国見岳の神籬保存会、昭和62年11月
- 資料(3) 宮崎日日新聞「古代の神籬（ひもろぎ）跡見つかる、えびの・矢岳高原」平成3年9月6日
- 資料(4) 中島和子「考古ニュース：矢岳高原で古代の神籬を確認」考古学ジャーナル、平成3年11月号
- 資料(5) 中島和子「考古ニュース：国見岳山頂の神籬に星座を確認」考古学ジャーナル、平成3年4月号
- 資料(6) 宮崎日日新聞「古代からのメッセージ、巨石信仰跡、星座と符号」平成4年1月3日
- 資料(7) 中島和子「九州山地の主峰・国見岳の祭祀遺跡の部分調査に関する報告——旧社殿柱穴の発掘調査について」京都精華大学紀要第7号、平成6年10月号
- 資料(8) 読売新聞「自然保護の“叫び” 神楽で彩り——国見岳山頂」平成6年11月9日
- 資料(9) 夕刊デイリー「毎年秋厳かに山上祭、国見岳山頂の神籬（ひもろぎ）」平成8年1月1日
- 資料(10) 中島和子「震災で崩壊寸前の磐座に修復を：西宮・越木岩神社」朝日新聞・文化欄、平成9年9月12日

南米ペルーと日本にみる太陽崇拜の古代遺跡について

Comparative Study of Megalith Shrines for Sun-Worship
in Ancient Japan and Peru with regard to Iwakuras in Japan
and The Machu Picchu in Pre-Inka Era

中 島 和 子

Yoriko NAKAJIMA

目 次

- ・「古代における政治と祀り」へ
- ・太陽崇拜の古代祭場
 - 日本の神籬・磐座
 - ペルーのマチュピチュ遺跡
- ・文化的類似性
- ・「二つで一つ」の思想
- ・伝播か多発性偶然か
- ・古代文化の特徴
- ・自然は崇拝すべきもの
- ・文化の歴史的連続性
- ・研究への抱負

「古代における政治と祀り」への転化

現代アメリカ政治を専攻していた私がなぜ古代の政治へ研究テーマを変えたかについて説明いたします。一つは、四半世紀にわたる先の研究が、1989年、著書として出版されました。「黒人の政治参加と第三世紀アメリカの出発」です。研究に完成ということはありませんが、これで一応の完結性を持つことができたのです。そしてその時、すでに次の研究テーマが待ちかまえていたのです。それは、平和の問題でした。現在必要なものは、国家間の平和（国際平和）ではなく、また世界中の人間のみならずの平和（世界平和）でもありません。現在は、人間のみならず、この地球上に生きとし生きるすべての生物が危機に瀕しています。地球そのものもです。地球平和、グローバル・ピースが叫ばれる理由です。そのための新しい思想が必要なのです。新しい社会を生み、支えることのできる新しい思想・世界観です。その平和なる新しい社会とはどんな社会でしょうか。それは、まず国境のない社会といえましょう。

しかし国境なき社会とは、具体的に言ってどのような社会でしょうか。どのような思想・世界観によって生み出され支えられるのでしょうか。実は、その答を私たちは知りません。なぜなら私たちは何千年もの長い間、国境のある世界に住んできたからです。世界が国家によって分割され、互いに競い、相争う世界に住んできました。国境があるということは県境があるのみならず、個人の家にも垣根があるということです。すべての人や団体や国家が己の私有財産を守り拡大することを目標として相争う社会ということです。何千年の間経験しなかったことを、私たちはいかにして知りうるのでしょうか。それは不可能です。たった一つ可能な方法があるとすれば、それは歴史を遡ることです。国境のなかった縄文の昔に戻って、そのときの社会の仕組み、その世界観はどのようなものであったかを学び、参考にして未来を考える。つま

り、過去に学んで未来を拓くという方法です。

そこで、私の研究テーマは急転化し、「現代政治」から「古代の政治と祀り」へ変わることになりました。具体的には、アメリカ研究の継続としてアメリカの古代先住民の残した岩絵、petroglyphs、や土偶、figurines、の研究、また古代日本に関しては、国家発生のはるか以前の縄文時代、すなわち人々が未だ氏族制度の下で生活し、太陽を崇拝し、自然を崇拝しアニミズムであった時代に遡り、その国境なき社会の仕組み、また、それを支えた世界観を研究することになりました。まず、縄文人を知るうえに体験的に接触できるものとして、彼らが築いた古代祭場としての磐座（いわくら）を研究し、それを通して先のテーマに近づこうとしました。

太陽崇拝の古代祭場

A. 日本の神籬・磐座

ところで、日本では古代祭場のことを昔は神籬（ひもろぎ）と申しました。これは^{ひもろぎ}靈天降域、すなわち神が天から降臨される場所という意味で、それは聖なる岩や土地、また御神木でした。なかでも巨石で構築された神籬を、磐座（いわくら）・磐境（いわさか）と呼ぶことがあります。註④ すなわち磐座とは木材による神社建築が始まるはるか以前、縄文草創期以前に古代人が巨石をもって築いた自然（太陽）崇拝の祭場のことで、磐境とは、垣根のように磐座を取り囲んで配置されている添え石です。外国で一般に良く知られているものとしてメンヒル、menhir（立石）やドルメン、dolmen（机石）やクロムレック、cromlech（半円形の列石）、トリリトン、triliton（2個の立石の上に横長の石を載せたもの）またストーン・サークル（環状列石）が挙げられます。英国のストーン・ヘンジやフランスのカルナック列石またケルト人の残した巨石建造物のなかには同じ流れを継ぐものがあります。山の多い日本では、その多くは天に近い山上に構築されています。ずっと後世になって木材を使って社殿が建てられるようになると、人々は便利にしたがって山麓に下宮を造るようになります。さらに人々の間に便利主義が高まり、自分たちの住んでいる里の近くに里宮を造り、次第に山麓の下宮を忘れ、山頂にある元宮としての磐座をも忘れ果ててしまったのです。しかし、奈良の大神神社のように、両者が密接しているところでは、背後の三輪山の磐座を神社の本殿として祀り、その山麓にある社殿は拝殿のみを置くとしています。つまり神社建築としての本殿はありません。裏山にある磐座を今も本殿として祀っています。また、西宮の^{こしきいね}越木岩神社は、磐座と神社建築が同一境内にあります。しかし大方は里宮としての神社は磐座のある山から遠く離れ、この両者の関係は忘れ去られ、神官でさえ知らない場合が多々見られるのが現状です。しかし、祭典儀式のなかに残存している場合があります。例えば、京都の上賀茂神社です。本殿に向かって左側の方へ少し歩きますと小さな立て札が立っており、そこに「御神山」と書かれています。その立て札の

はるか彼方を展望すると、そこには丸い美しい山があります。その山に元宮としての磐座があるのです。したがって祭典の時には、その磐座から御祭神を迎えるという原則が今も残っているそうです。

このように磐座は日本文化の淵源を示す貴重な文化財ですが、実はその多くは文化財として指定されることなく、最近の開発によってゴルフ場や会社の寮の建設のために破壊される場合が多々あります。神戸の裏山である六甲山へ登ると、いくつかのゴルフ場があり、それを展望すると巨大な石があちこちに残っています。これはそこに昔、磐座または磐境があったことを示しています。六甲山の上には、300を超えた会社が寮を建て、人工スキー場などもありますが、こうした開発が進むごとに古代の祭場が破壊されるとは、まことに痛ましいことです。

その理由は、戦後の日本社会において、古墳時代以前の日本文化に関する研究が一種のタブーになってきたからです。なぜ、タブーとなったかと言いますと、それは第二次戦争に対する日本人の反省と批判から生まれています。終戦前の日本の軍国主義政府は「神国日本」を主張するために、古事記に書かれている思想を利用したのです。つまり太陽神（天照大神）の直系である天皇陛下が治める日本は、比類なき「神の国」であるから、大国アメリカの侵略からアジアの小国を守り東亜共栄圏を築く使命をもつ、として戦争の正義を説明したのです。このような軍国主義政府に対する批判は必要ですが、その政府が利用した『古事記』に書かれている神代の思想は、本来いかなる国家とも無縁のものなのです。つまり、それは国家発生以前のはるか昔の氏族制度の時代、自然崇拜、太陽崇拜の時代の世界観で、国家のナショナリズムとは無関係なものなのです。しかし、それを戦前の日本政府は利用したのです。ですから戦後、私たち日本人は軍国主義政府を批判するのみならず、それから『古事記』の思想を切り離して考え直さなければならなかったのです。

しかし現実には、日本人の国民性と言いましょか、「坊主憎けりゃ、袈裟まで憎い」というように、『古事記』をも忌み嫌い、政治と切り離して研究することを避けてきました。古墳時代以前の日本の歴史を探究しようとする、それこそ日本文化の淵源に関わる重要な問題なのですが、何か、右翼に傾くのではないかと、軍国主義の復活に連なるのではないかと、疑われ危険視されるという風潮がずっと続いており、政府をはじめ学者も市民もそのことに触れることを避けてきたのです。したがって、戦後、磐座・磐境を文化財として指定・保護すべき国・県・市の関係者は、大学でそのように教えられなかった、または磐座に関しては殆ど習っていない。そこで、知らないことは分からない、分からないことは間違っていると考えたり、責任を問われたくないという理由で、問題をごまかし盪回しにしてきたのが戦後の行政です。

たとえば、六甲山の麓の芦屋市には、直径4メートルの「八咫の鏡」岩があります（後出）。それなどはひとたびはその鏡石を御神体として神社ができたほど、周辺の人々の尊敬を集めて

九州の磐座から (1)

Some of Iwakuras (Ancient Megalith Shrine) in Kyushu, Japan (1)



Fig. 1 押戸石遺跡：その全景（南小国町提供）



Fig. 2 押戸石遺跡の磐座と中西旭博士

Oshido Site: it's general view Fig. 1 and it's Iwakura Fig. 2 (中西天珠提供)

いました。しかし戦後になると丸裸にされ、文化財の指定も受けられず山野に放置され、その脇1メートルのところまで芦屋大学が校舎を広げるといふ危機状況にあります。私は、国境なき時代を研究するために、今残存する磐座を探查することになりましたが、その研究対象が以上のような危機状況にあることを知り、これらの保護を訴えるためにも、調査・研究して世にださねばならないという使命感を抱くことになりました。実際、このような歴史的な文化財はいったん破壊されると、もはや私たちの手では復元することはできません。いずれは国や県の保護を受けることになると思いますが、それまでに破壊されてしまったのでは取り返しがつかないということです。

それでは、その磐座とはどのような形状をしているものかを、まず日本の磐座からビデオによって皆さんに紹介いたします。註⑤次に昨年南米に行き、ペルーの遺跡を廻りました。そこにある遺跡のほとんどは太陽崇拝の祭場です。多くのピラミッドがあり、リマの大学の考古学者である友人は、リマ郊外の発掘に従事していますがそこにはピラミッドが32基存在すると言います。その後ペルー北部のトクメ、Tokumeへ行きました。最近ピラミッドが発見されたという町ですが、そこにはピラミッドが26基あるということでした。海岸沿いの砂漠地帯では雨の降らないことを前提として砂で作ったアドベという日干し煉瓦でピラミッドを建てるので、今年のようにエルニーニョ現象による大雨が続くと表面の美しい彫刻が流され、また長年の風化も手伝って外観はただの砂山に見えたため、長く見逃されてきたのでした。確かに信じられない数の太陽崇拝のピラミッドや神殿があります。そのなかのマチュピチュ遺跡を取り上げます。そして同じ太陽崇拝の祭場として日本の磐座との類似性や原則における共通性のようなものがあるか否かを検証したいと思います。

九州の磐座から —

1. 押戸石遺跡

阿蘇の北、南小国町の「押戸石」遺跡です。熊本の地元新聞に「巨大な石がごろごろあり、鬼の落としのお手玉と言われている」という記事がありましたので、磐座の専門家、中西旭先生と一緒に調査に行きました。Fig.①は、その全景を空中から写したものです。Fig.②は、その中心的な岩すなわち磐座です。この写真は磐座の南面を示していますが、西の面は、はるか玄界灘を眺むような形が仕組まれており、その下には神代文字が書かれています。磐座を頂点として形状のいろいろに異なった岩が、三段に分れては配置されています。なかには剣のようなもの動物の集まりのような石群れ、象のようで象でない進化の途上にあるかの動物のような巨石など興味はつきません。これらの岩は磐座を囲んでいるので磐境（いわさか）と呼ばれています。中西先生はこの遺跡を、古代の「三段神籬^{ひもろぎ}」と結論付けられ、それをもって南小国町はさっそく町指定の文化財に指定し、公の保護を受けることになりました。

2. 国見岳の神籬

九州を斜めに横切っている最古層からなる九州山地の主峰・国見岳山頂の磐座です。Fig.③は、南方の小国見岳から国見岳山頂を見上げた写真です。山頂の中央に円錐型に突出しているのが神籬です。高さ7m、底面は直径が約30m、上面の直径が約15m。

九州の磐座（いわくら）から (2)
Some of Iwakuras (Ancient Megalith Shrine)
in Kyushu, Japan (2)



Fig. 3 国見岳山頂の古代祭場 その遠景
Kunimitake Site: The Top of Mt. Kunimitake

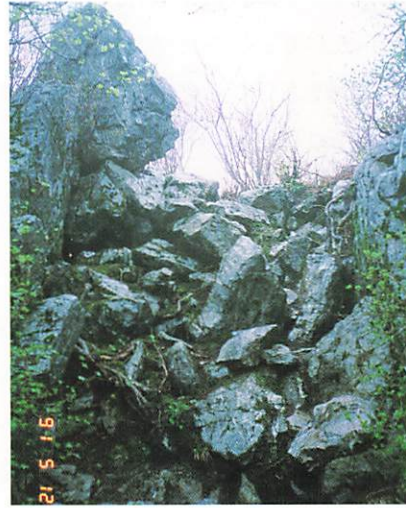


Fig. 4 国見岳：祭場への石の階段と岩門
Stone stairs&stone gate of Kunimitake site

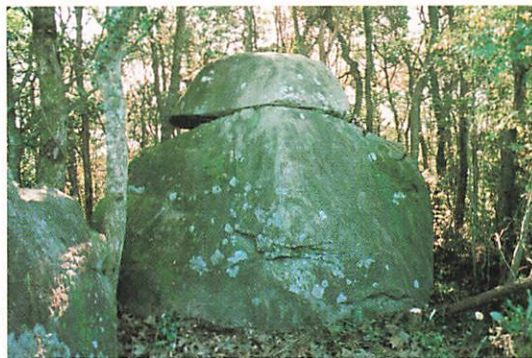


Fig. 5 笠石遺跡の磐座 矢岳高原、えびの市
Kasaishi Site in Yatake Hights, Ebino

Fig.④は、この神籬へ登る石の階段とその上部の左側に配置された人面のように見える巨石。これは岩門と呼ばれ、写真にはありませんが右側にはハート型の巨石があり、両者で鳥居の役割を果たしています。岩門の先は直径15mの平地になっていてそこに磐座があります。

その特徴は、第一に磐座が二つあること。第二にどちらもほぼ同形同寸で山型に組まれており、第三にその二つの磐座が、東西に相對峙していることです。国見岳は、宮崎-熊本両県に跨がるため、県境が神籬の中央を走り、東磐座 (Fig.⑳-19頁) は宮崎県に、西磐座 (Fig.㉔) は、熊本県に属しています。何故ここには磐座が二つあるのか、については太陽崇拜の祭場として深い意味があります。また、伊勢神宮の建築様式やマチュピチュ遺跡にも共通するものがありますので、後ほど再度取りあげることになります。西磐座は、左右にぐっと翼を広げたように鬘が美しく伸びています。幅は5メートル、そして高さは1メートル20センチですが、上には穴が開くように磐が組まれ、そこに榊や御幣を立てたと考えられます。これに對峙する東磐座は、頂天が美しく尖り、左右に翼を張って威風堂々たる雄姿であったのですが、ある一私人がその両翼を三分の一ずつ削り取り、幅5m以上あったものが現在では180cmとなり頂点をも削除してそこに大きな祠を載せるという暴挙を行っていますので、残念ながら昔の雄姿は写真でしか伺うことはできません。

3. 「笠石」

熊本-宮崎-鹿児島県の三県に跨った矢岳=えびの地域には一連の神籬があります。Fig.⑤は、矢岳高原にある「笠石」と呼ばれている磐座で、現在は広い牧場に面しています。実はその牧場は、古代の人々が大勢集まって祭りをした広場だったのです。牧場主の話では、牧場を作るにあたって、累々たる岩をのけるのに涙を流したということです。それらは、磐境であったのでしょう。笠石の傍には、美しい鏡岩が添えてあります。

六甲山および甲山周辺の磐座から —

4. 「三国岩」

高さ10mにおよんで巨石が積みあげられています (Fig.⑥)。その大きさに人々は驚き名所の立て札を立てていますが、これは岩門で、この奥に磐座があります。しかしその磐座の前の祭りの広場には川西倉庫と大和製鋼会社が寮を建てています。幸い磐座をなす三つの岩は庭先の奥の藪のなかに残っていましたが、建築にあたっては累々たる磐境を排除するのに大変な苦勞をしたということです。この磐座は、一見ただの岩のようですが、7月下旬夏祭りの時期になると太陽の位置によってそのうちの一つの岩に表面に人面の様なまた象形文字のような彫り物が浮かび上がるのですが、長い年月に磨滅して読み取ることができません。昨年からのこの寮の

六甲山=甲山の磐座から : Some Iwakuras on Mt.Rokkoh = Mt.Kabuto in Kobe

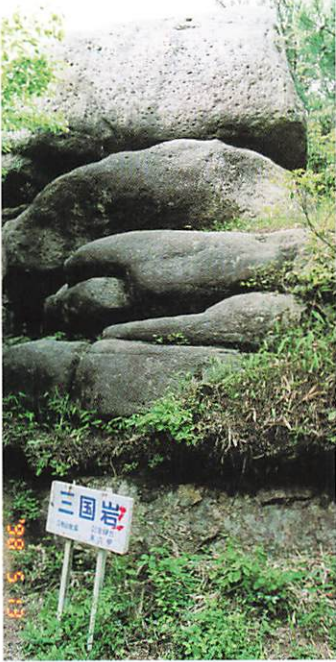


Fig. 6 三国岩の岩門
Stone Gate of Mikuni-Iwa Site

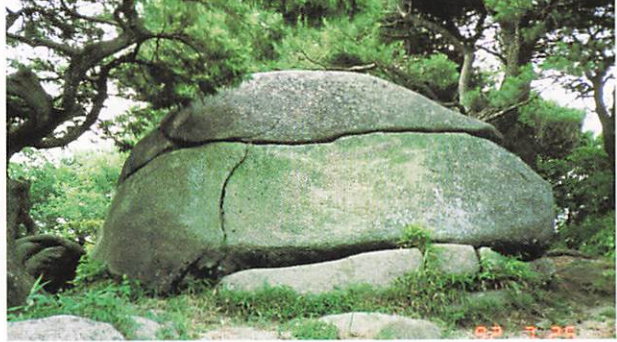


Fig. 7 「天の穂日」の磐座 : Iwakura of Ameno-hohi Site



Fig. 8 剣岩
Turugi (Sword) Rock



Fig.10 こしき岩の磐座
Iwakura of Koshiki Iwa

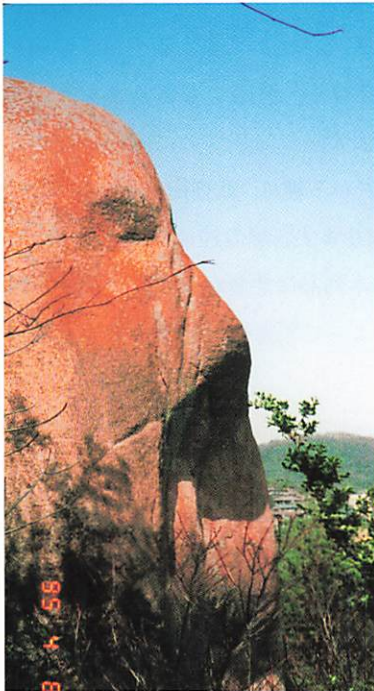


Fig.11 顔の岩 Face Rock



Fig. 9 やたの鏡石
Yatano Kagami (Yata-Mirror) Rock

破損がひどく、現在山荘レストランに建て直しをしていますが、周辺の木を切り払って現在丸裸かにされ見せ物に供せられていて痛ましい限りです。

5. 「天の穂日」の磐座

人工スキー場で有名な六甲山頂のカントリーハウスの丘上にある磐座で、古事記によると天照大神の第二皇子・天の穂日の命を祀った神籬です。山麓の芦屋神社は、この下宮に当たります。経営者である阪神電鉄の話では、ここにスキー場を作るための水道を敷いた時に、累々あった岩を排除したということです。Fig.⑦は、辛うじて残った磐座です。周辺の磐境が昔どおりの配置ではないとは残念なことです。

6. 剣岩

六甲山中腹にある「剣岩」Fig.⑧は、芦屋市の奥池にあります。先に述べたような太陽崇拝などの磐座があると、それを囲む垣根のように形状の多様な岩が磐境として配置されていますが、そのなかには「三種の神器」を象ったものがあります。「三種の神器」は、天皇家の王位継承の神器だけではなく、当時は道徳のシンボルであったようです。つまり「鏡」は神の心を映し、また人の心をも映しだす。「剣」は悪にたいする勇気、「玉」は人々の間の協力・和を象徴していました。尊い磐座には、岩によって象られた「三種の神器」が磐境として添えてある場合が多々みられますが、この六甲山の「天の叢雲（あめのむらくも）の剣」岩や、この後の「八咫（やた）の鏡」岩は、磐境であるとともに、それ自身尊く、磐座でもあります。この「剣岩」は、高さが10mで、表面にはオリオン座の三つ星が大犬座のシリウスに向かって描かれています。また『古事記』によりますと、「剣岩」に降臨される神は、武甕槌神（たけみかづちのかみ）すなわち雷の神で、このそばには「風」の岩もあります。風の神は経津主神（ふつぬしのかみ）です。この二柱の神は碓いの神で、その昔、日本列島に悪魔が入り政治をかき乱した時に、この二柱の神が呼ばれ、その稲光と音響、強風によって悪魔を太平洋の彼方へ吹き飛ばしたとのことです。

7. 「八咫の鏡」岩

「剣岩」の真下の六甲山山麓、芦屋市の六麓荘町にあります。直径が4m、そして鏡の縁を飾るフリルは今も残っています（Fig.⑨）。磐境であるとともに、非常に尊い磐座でもあるので、昔は、これを御神体として神社ができたほどでしたが、戦後はまったく顧みられることなく、文化財の指定も受けられないものですから、周辺とともにさびれまして、拡張した芦屋大学が、目の前1mの所まで迫り、阪神大震災の影響を受けて、最近はやや傾いたように思われます。

8. こしき岩神社の磐座

先に申しましたように、元宮としての磐座と里宮としての神社建築が一つの境内にある稀な例がこの神社です。神社の本殿の背後に聳える高さ10メートル、周囲30メートルの巨岩があります。神社はこの岩を「霊岩・こしき岩」と呼んでいます。神社の言い伝えによると、大阪城築城のためにこれを切り出そうとしたところ、忽ち岩中より鶏鳴し、白煙立ち上り、その靈氣に打たれて石工たちは転げ落ちたと書かれています。この巨岩はその大きさ故に人々に畏敬の念を起こさせていますが、実はこれは岩門いわかどであって、さらに尊い磐座は、背後に続く鬱蒼とした林のなかに、人知れずひっそりと佇んでいるのです (Fig.⑩)。160センチ四方の礎石の上に、人型のように組まれています。しかし、背後のただ一本の松の木を切らなかったために先の阪神大震災で岩が飛び出し修復を必要としています。松の根が岩の間に伸びて岩と岩を離していたのです。

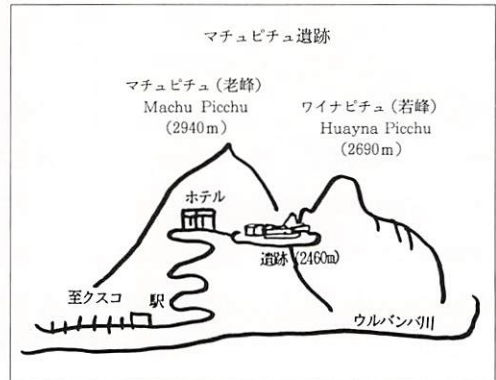
9. 西宮市の甲山周辺は県立森林公園になっていますが、その中にもたくさんの磐座・磐境があります。そのうちの一つを紹介します。登山クラブの人たちはこの岩をボールドヘッド（禿げ頭）石と呼んで、これに金かねを打って登山の練習をしています。反対側は絶壁になっているので見る人はありませんが、実はその反対の面こそ重要なのです。Fig.⑪は、この岩に、目があり、鼻があり、そして大きく口を開けて、雄叫たけびをしている様子です。東南の方角には大阪や奈良があります。向こうに見える丸い美しい山は甲山かぶとです。

B. ペルーのマチュピチュ遺跡, Machu Picchu in Peru

主都リマから空路一時間でインカ帝国の主都クスコ, Cusco, に着きます。しかしこの古都は、海拔3800メートル、富士山の1.5倍の高さにあります。クスコからさらにアンデス山脈へ汽車で数時間行くと、インカの「空中都市」と言われるマチュピチュ遺跡があります。インカ帝国は14世紀半ばから約2世紀の間繁栄を続けていましたが、1532年に始まるスペイン軍の支配によって1572年に滅ぼされてしまいます。その間、多くのインカ人は反乱を試み、また逃亡します。この山中のマチュピチュにまで逃げ込み、例のインカの石組みで、住居を作り、神殿や政庁を建て耕作の場を作り、身分に応じた水浴びの場を作り、日時計を設置し、多いときには一万人を越える住民がいたと言われています。しかし、スペイン軍はこの山中にまでも追跡の手を緩めず、最後に残った女性や子供までも殺戮し、その後350年もの長い間、この「空中都市」は草木のなかに深く埋もれていましたが、1911年にアメリカの青年、ハイラム・ビンガムがこれを発見し、世界的な注目を集めることになりました。



Fig.12 インカの石組み — 剃刀の刃も通らぬ

Fig.13 図解 マチュピチュ遺跡
Machu Picchu, Peru

ところで、マチュピチュ遺跡は、大小の二つの峰からなっています (Fig.13)。大きな峰は「マチュピチュ (老峰)」, 小さな峰は「ワイナピチュ (若峰)」と呼ばれています。

— 暫く、日の出のマチュピチュの景色をご覧ください。 — ビデオ15分

さて、このマチュピチュ遺跡を取り上げた理由は、インカの石組みを紹介するためではありません。インカの石組みはご存じのように、巨石を剃刀の刃も入らない位にぴったりと積み上げていて有名です (Fig.12)。またこの空中都市には、人々の生活を支えるいろいろな場所がありますが、観光ガイドが詳しく案内してくれますので、ここでは、観光に関しては、すべて省き、マチュピチュにたいする私の関心を説明いたします。日本の磐座の多くは太陽崇拝の磐座ですが、この南米の遺跡を見ても、その大部分が太陽崇拝の祭場です。マチュピチュはアンデス山脈の中にあります。世界一長い砂漠地帯と言われているペルーの海岸地帯にも数多くのピラミッドや神殿があるのは、先述の通りです。これらのピラミッドは、砂を固めたアドベ (日干しレンガ) によって造られており、太陽崇拝の盛んなことを示しています。統治者が代わる度に太陽への誓いとして太陽崇拝の神殿やピラミッドを建てたのではないかとと思われるほどです。そこで、インカが逃げてくる以前に、マチュピチュも太陽崇拝の祭場であったであろうことは想像できますが、それを証拠づける何かが残存しないだろうかという好奇心を持ってまいりました。ところで、この祭祀遺跡は、若い峰・ワイナピチュの麓に広がっています。地元インディオたちが制服を着て、ここの管理にあたっています。雑草も抜いてあり、ゴミもなく、非常によく整備されています。ところで、このワイナピチュの頂上に何か磐座に類したものが残存しているのではないかと考えていたのですから、ぜひとも、ワイナピチュ (若峰) に登りたいと思っていました。下記の解説は私の心を捉えました。

「巨岩の洞門が行く手に立ち塞がり、道はそのなかに吸い込まれる。この洞門は入口が大きく、出口が小さい。階段も狭くなり壁も傾いているので、一人がようやく身体を捻じって通れるにすぎない。これから先は地形に従って屈折する階段が、石垣の間を縫って登っている。分岐点から40-50分でワイナ・ピチュの頂上に達する。ここには1メートル平方の空地もなく、ただ角張った巨岩が群立しているだけである。そのうちの一つに座席の形を彫った巨岩がある。神の王座として作られたものか、あるいは単に監視の兵の腰掛けであったものか判らない。」註⑥

しかし、ちょうど火事があったために登山は禁止で、登ることができませんでした。そこで翌日、マチュピチュの老峰の方に登ろうと思い、教えられた道を真直ぐに歩いて行きました。老峰は、ご覧のとおりまったくの岩山で空に突出しており、頂上には国旗が立っています(Fig⑤-19頁)。酸素のないところを苦勞して1時間この道を歩きましたが、だんだんマチュピチュから離れていくのです。ようやく、通りかかったインディオに尋ねると、この道ではないと言うのです。他にどの道があるか聞くと、「道はなく、あの岩山を真直ぐよじ登るしか方法はない」ということでした。しかし「非常に危険なので、2人以上で行かなくてはいけない」とのことです。これを聞いて、私は残念ながらマチュピチュに登ることをあきらめました。

しかし、1時間歩いたお陰で、ふと振り返ると、はるかにワイナピチュとその下の遺跡を遠景として見ることができました。Fig.⑩-21頁はそれを示しています。ワイナピチュの山の形が近くで見るとは大変違って、後ろへ向かって鬚が波打つように長く力強く伸びている一方、峰の前方はまるで削られたかのように鋭く抉られていて、不思議な印象を受けました。この点に関しては後で取り上げます。

文化的類似性

プレ・インカの祭場 — 磐座

さて、再び遺跡に戻り、ワイナピチュの下の前面に拡がる遺跡をよく見渡しました。Fig.⑩はインカの石組みを示した写真です。いずれも四角い巨石をぴたっと貼り合わせ、剃刀の刃も通らないほどに組み合わせられています。ところが遺跡全体を注意深く観察しますと、非常によく整備された美しい遺跡であるだけに、ワイナピチュの麓の石垣の上に1か所、雑草の生え茂った暗い場所があるのに気がつきました。雑草が伸び放題、灌木も茂っていて、ここだけは清掃もされて居らず、他とは全然違っています。石垣を三段登り、近づいて良く見ると、雑草に覆われた中心に、何と日本の磐座と同じように、自然石を組んで祭場が作られているてはありま

せんか。生憎、鎌も軍手も持ち合わせず、写真を写す前に雑草を取り除くことができず、磐座の全貌をはっきりと撮すことができませんでしたが、これは紛れもなくインカ以前の祭場跡です (Fig. ㉞)。その配置からみて、これはワイナピチュ (若峰) の下宮のように見えました。

さらによく遺跡を見渡しますと、巨大な自然石が遺跡の外周や端の方にも少なからず残っています。例えばある巨石は、頂上がウサギの耳のように2つに分かれています。そして側面に線刻文字のようなものが彫られており、足元には小さいながらピラミッド型の岩が配置されています。また、遺跡の南端にはストーンサークルなどもあります。これらの岩はすべて外周か南隅に集められていてインカ以前のマチュピチュ遺跡を偲ぶ良い材料になっています。

そこで、日本の磐座・磐境の岩と、今回訪ねた南米の遺跡で見たプレ・インカのそれらとの間には類似するものがありますので、幾つか紹介いたします。

Type I: 山型の磐座: Fig. ㉟は、ワイナピチュ (若峰) の直下にある一枚岩の山型の磐座です。後の高い山を象どったかに見えますが、現地ではパチャママ (大地の神) を祀っているとのことなので、九州山地・国見岳山頂の二つの山型の磐座 Fig. ㉞と Fig. ㉟を思い浮かべものがあります。

Type II: 菊の花のような形をした岩が目につきました。Fig. ㊱は、先述のワイナピチュ麓の下宮の傍らにあったもの。これと同じタイプの岩は、クスコ県アバンカイ, Abancay, の郊外にあるサイウィテ, Sayhuiti にもあります (Fig. ㊲)。さらに、北米インディアンの聖山と言われるナバホ山の中にもあります (Fig. ㊳)。

Type III: 方向石: 東西または南北を示す岩として方向石があります。日本の神籬には良く見られる岩です。同じ形状のものがクスコ郊外のサイウィテで見つかりました (Fig. 17)。石は割れているのではなく、等間隔の隙間を開けるよう二つの石を配置して方向を示しています。三内丸山遺跡の北に雲谷高原があり、現在はスキー場になっていますが、昔は神籬 (古代祭場) であったことを残存する岩の配置で知ることができます (Fig. ㊴)。Fig. ㊴の方向石は、サイウィテ遺跡で見つかった方向石ですが、一つの石に東西と南北を示しています。このように大平洋を越えて似通った磐座・磐境があることは、そこに共通した思想があったように思われます。

Type IV: 鳥の岩です。Fig. ㊵は北米のナバホ山にある鳥の岩です。非常に鋭い目をしています。鷲でしょうか。次の Fig. ㊶は西宮市甲山周辺にある鳥の岩です。後ろから見た鳥の姿をしています。これとよく似た岩がサイウィテの遺跡の中にあります。Fig. ㊷は左を向いている鳥です。さらに西宮甲山の南には、Fig. ㊸の鳥の岩があります。二本の脚を揃えていて、羽があります。その頭を拡大すると (Fig. ㊹)。嘴の上には鋭くつり上がった眼が光っています。

他にも、飛鳥の酒船石に類するものや、日時計など、比較研究の対象となるものがあります。

磐境にみる文化的類似性
Cultural Similarity among Surrounding Stones

Type(I)



Fig.14 南米・マチュピチュ遺跡
Machu Picchu, Peru

Type(II) 方向石, Rock of Direction



Fig.17 南米・サイウイテ岩遺跡
Sayhuiti, Peru



Fig.15 南米・サイウイテ岩遺跡
Sayhuiti, Peru



Fig.18 雲谷高原(三内丸山遺跡の北)
Moya Hights, North Sannai-Maruyama Site, Japan



Fig.16 北米・ナビホ山
Mt.Navajo, N.M, USA



Fig.19 南米・サイウイテ岩遺跡
Sayhuiti, Peru

Type(Ⅲ) 鳥の岩 Bird Rock



Fig.20 北米・ナハホ山
Mt.Navajo, N.M, USA



Fig.21 日本・甲山森林公園, 西宮市
Mt.Kabuto Forest Park in Nishinomiya, Japan



Fig.22 南米・サイウイテ岩遺跡
Sayhuiti, Peru

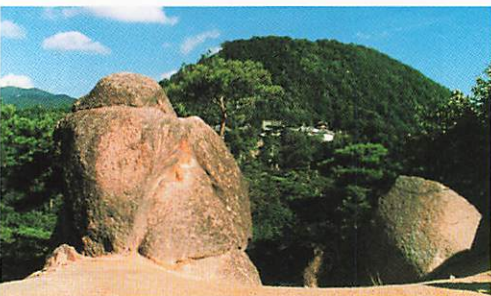


Fig.23 甲山森林公園, 西宮市
Mt.Kabuto Forest Park in Nishinomiya, Japan

「二つで一つ」の思想

九州の国見岳の古代斎場には二つの山型の磐座が、県境を挟み一つは宮崎県側に東磐座、そして熊本県側には西磐座として、東西に相對峙していることは、先述の通りです。そしてマチュピチュも、老峰マチュピチュと若峰ワイナピチュとの二つの峰が南北に相對峙しています。つまり岩と峰の相違こそありますが「二つで一つ」を成しているのです。この共通点は、単なる偶然でしょうか、それともそこに何か特別な関連があるのでしょうか、それを洞察するために、まず太陽崇拜の磐座である国見岳の磐座と同じく太陽崇拜の神社である伊勢神宮の建築様式を比較検討します。

これに関して、磐座の専門家中西旭中央大学名誉教授は、国見岳の神籬についての調査のなかで次のように言われています。

「主たる神座が同型で陰陽的対応におかれることは、(中略)後世末ながく全国神社の本宗と仰がれる伊勢の神宮のあり方にも表示される。伊勢神宮では、内宮と外宮とが、同型の社殿をもって、東西に對峙するだけではなく、その内宮も、正殿と^{あままつりみや}荒祭宮とが、同型の社殿をもって南北に呼応する。それは、周知のように、天照



Fig.24 左図の頭部
The head of the left bird

二つで一つの思想：荒（アラ）磐座と和（ニギ）磐座
Architectural Similarity of the Sun-Worsbip sites



マチュピチュ遺跡
Fig.25 老峰, Machu Picchu



ワイナピチュ
Fig.27 若峰, Huayna Picchu



国見岳, Mt. Kunimitake
Fig.26 東（アラ）磐座, East ara-Iwakura



国見岳, Mt. Kunimitake
Fig.28 西（ニギ）磐座, West nigu-Iwakura



Fig.29 ワイナピチュの下宮
pre-Inka Iwakura near Huayna Picchu



Fig.30 山型の磐座—パチャママの神殿
ワイナピチュの麓
on foot of Huayna Picchu

大御神のニギミタマ（和御魂）とアラミタマ（荒御魂）とがそれぞれ祭られるものとされる。また、外宮においても、まったく同様に、正殿と多賀宮とが、ニギ（和）ヒモロギとアラ（荒）ヒモロギの対応をなす。わが国には、『陰陽』の思想が支那大陸から輸入される前に、古事記の劈頭にあるように、『神皇産霊・高皇産霊』の陰陽的見方が透徹されていた。」註⑦

また、国見岳の二つの磐座それぞれについては、その置かれた状況から、次のように説明されている。熊本県の西磐座は御祭神の和御魂の神座であり、東（宮崎県）側の磐座は御祭神の荒御魂の神座であるとする。すなわち西磐座は「背後を灌木で被われ、巨石群もその頭部を出し、やや低地であって頂上のすべてを引き込む体制にある」。他方東磐座は「わずかであるが高位にあり、外界が眼下に全望されるとともに風雪のすべてをまともに受ける状況にある。ほとんど同型、同質であるが、いずれが主たるヒモロギ（神座）としてのニギ（陰）であり、アラ（陽）であるかは、一見して自明とされよう。すなわち、西側の磐座がご祭神のニギミタマの神座であり、東側のそれがそのアラミタマの神座と仰がれるのである。」註⑧

玉垣、水垣によって幾重にも包囲されている伊勢の正殿と国見岳の西磐座との一致、また社殿を垣根によって隠さず、高所であって眼下を見下ろし、直接外界に姿を見せている伊勢神宮の荒祭宮と国見岳の東磐座との類似が指摘された。つまり、国見岳の二つの磐座のあり方は伊勢の皇大神宮の建築様式に引き継がれているということです。

さて、次にはこの国見岳の二つの磐座とマチュピチュの二つの峰を比較してみましょう。マチュピチュ遺跡の老峰マチュピチュ（Fig.25）は、国見岳の東磐座（Fig.26）と共通した特徴をもっています。どちらも空中に突出しており、外界が眼下に全望されると共に、すべての風雪をその身で受け止めています。また少し高い位置にあり、大きくもあります。他方、もう一つの磐座、つまり国見岳の西磐座（Fig.28）と、マチュピチュのワイナピチュ（若峰）Fig.27は、どちらも少し低地にあり、山上のすべてを引き込むまたは抱え込む形をしています。またいずれも背後を灌木または山で囲まれ、前には祭場があります。西磐座の前には神社建築時代に建てられた社殿の柱穴が発掘されています。註⑨ したがって、岩と峰との違いこそあれ、前者は太陽神のアラ（荒）ミタマ祀る神籬（古代祭場）であり、伊勢神宮・内宮の荒祭宮に匹敵します。また後者は、ニギ（和）ミタマを祀る神籬で、それは伊勢神宮の内宮の正殿に匹敵します。

すなわち神社建築としての伊勢神宮、磐座としての国見岳の神籬はいずれも太陽崇拜の祭場として、共通の原則によって建てられています。そしてその共通の原則が南米ペルーのマチュピチュにも非常にはっきりと見られるということです。世界が太陽を崇拜していた時代に国境はありませんでした。国家の発生するはるか以前ですから。太平洋をはさんで同じ原則が見られるということは、文化的伝播によるものでしょうか。それとも単に偶然なのでしょう。これは非常に難しい問題です。なぜならば私たち現代人の頭脳はそれを判断するにはあまりにも

小さいのです。視野は近視眼的、そして知恵は浅い、また歴史的想像力に乏しく、古代社会については固定観念に縛られています。したがって自分に分からないことは全面否定または間違いだと言い張る人が大勢います。その方が科学的であるように見えるし、無難だからです。しかし否定するだけの、または間違いだと結論づけるだけの証拠はあるでしょうか。無いのです。

伝播か多発性偶然か

私はこの一事をもって縄文人がはるか昔、太平洋を渡ってアンデス山脈の中にマチュピチュという太陽崇拝の斎場を創設したと主張しているわけではありません。私は、なぜそうなのかが、今は理解できなくても、事実を事実として認識する必要があるということを主張しているのです。発見される事実が多くなればなるほど、それは私たちの固

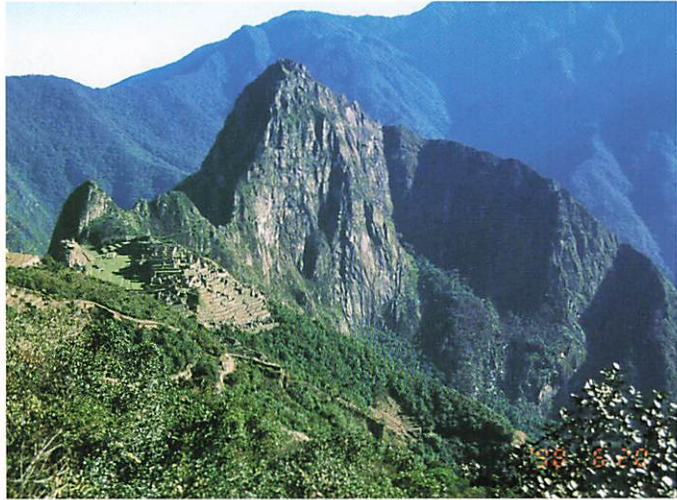


Fig.31 ワイナピチュの遠景

定観念を破るきっかけとなります。すでにこのような私たちの理解を超えた事実がたくさんあります。まずマチュピチュ遺跡に関して言えば、このすぐそばにナスカの地上絵があることを忘れてはなりません。誰があのような地上絵を描いたかについて、多くの調査・思索が重ねられていますが結論は出ていません。そして私たちにわからないことは宇宙人のせいにする傾向があります。しかしそれも非現実的な発想です。ナスカにははるか昔、あのような地上絵が描けるような人間が住んでいたということでしょう。それは縄文人かまたは縄文以前の人間、つまりプレ縄文人かもしれません。私たちには今のところ、その目的や技術、また誰が描いたのかが分らなくても、ナスカにあの地上絵があることは事実なのです。さらに重要なことはナスカの近くにマチュピチュ遺跡が存在するということです。マチュピチュはアンデス山脈中に、ナスカは海岸の砂漠地帯の中にあります。しかしこの両者は東西に別れてはいますが、その距離はわずか300キロメートルです。ナスカにあの地上絵を描けた人たちは、アンデスの山の中に多少の整形を施しながら太陽崇拝の祭場を造ることができたとしても、決して不思議ではないように思われます。

またよく知られている事実として、エクアドルの太平洋沿岸にあるバルデビア遺跡、Valdivia、があります。エクアドルはペルーに隣接した北方の国です。1965年、ここでは数千

年前と思われる地層から沢山の縄文土器の破片が発掘されました。地元の要請によって駆けつけたアメリカのスミソニアン研究所の考古学者たちは、これを見て縄文人の影響であると結論づけました。註⑩ エヴァンズ博士, Dr. Clifford Evans とともに発掘された土器の写真を携えて来日したベティ・メジャー博士, Dr. Betty Meggar は、昨年ペルーへの途上スミソニアン研究所に立ち寄った私に対して次のように語りました。「日本の学者を説得して30年が経ちますが、いまだ認められていません。」

日本の学者が認めない理由のひとつは、バルデビアで発掘された土器の破片の材質や形状が、日本のものと相違するという点です。今回、私はエクアドルの3つの町、すなわちバルデヴィアとグアヤキル市とキトー市の博物館を巡りながら、次のように思ったものです。土器の材質や形状はその土地の必要に応じて変わることがあります。しかし、「人」と「技術」があれば、土器は世界の必要どころへ伝播が可能であると考えたものでした。最近は考古学以外の分野で古代日本と古代南米とのつながりを示す調査がいくつか発表されています。その一つはブラジルのアラージョ博士, Dr. A. Arajo によるもので7000年前の糞石の調査により、日本および東南アジアに独特の寄生虫の卵の化石が、ブラジル郊外の遺跡で発掘されているということです。註⑪ この寄生虫は温暖の地にもみ生息可能なものであるので、彼らがアラスカ回りでなく、直接太平洋を渡って南米に到着したことを示す画期的な発見です。また、日本の医学者によって日本人と南米の北西部に住む先住民の間にはHTLVI型のウィルスにおいて共通性があることが発表されています。さらに北米の古代先住民の残した岩絵や土偶を見ると、なかには直接太平洋を渡ってきた人たちによって作られたと思われるものがあります。註⑫

これまでのところ日本の研究者は西ばかりを見てきました。何かが発掘されると、それは西のどの国が源泉であるかと、韓国か中国かシュメールかとアイデンティティを探すのが常習になっています。なぜ今まで東へ向かなかったかと言いますと、そこに太平洋があるからです。つまり現代人は多かれ少なかれ、次のように思っています。「自分たち現代人にできないことが、古代人にできるはずはない」と。確かに現代人は飛行機や客船といった巨大な機械がなければ、太平洋を渡ることはできません。パスポートも必要です。お金も要ります。向こうへ行って確かに泊めてくれるホテルや友人も必要です。着替えも要るでしょう。もし太平洋を古代人のような小さな木造船や葦船やヨットで渡るとしたら、それは大変な冒険です。食料も缶詰などを2か月分積んでいくとか、生命保険をかけるとか、遺言状を書いていくとか、大変な騒ぎです。ですから現代人にはできない。そして現代人はこう思います。「自分たちにできないことが未開な古代人にできるはずはない………」と。

果してそうでしょうか。そこで古代文化または古代人とは、私たちとどこがどう違うかを、また古代における東西交流可能性について、ここで考える必要があります。

古代文化の特徴

まず、第一に指摘することは、古代人と現代人の相違点です。現代人とは、人類発生以来最も能力の低下した人間だということです。機械があり機械に依存して生活しているために、人間本来の能力は極度に退化しています。小学生から眼鏡をかける子が多くなっています。ウォークマンによって聴覚も低下しています。空を見上げて星の数は少ししか見えません。スモッグがあるから。そして人間の視覚も極度に退化しています。テレビや新聞によって、すべてのことを判断しています。テレビがなければ明日の天気もわかりません。巨大地震が近づいていてもそれを予知することは、専門家といえども不可能です。地震が起きてからテレビをつけ、どこで起きたかを知るのが現代人です。自分では予感することができません。交通機関の発達によって足は極度に退化しています。一方、古代人はどうでしょうか。機械がなかった時代です。機械なしに生活をしてきた人たちです。その目は千里眼と言われるほどよく見えました。向こうの山の上で合図をする人の姿をも見ることができましたし、耳は地獄耳、歩けば猿ましろのごとく早く、走れば鳥のように。つまり人間の持つ肉体的な能力においては、私たちの想像を超えたすばらしい能力を持っていたと思います。そしてそのことは目に見えた能力だけではなく、第六感もまたすばらしく発達していたと考えられます。古代人は現代人が目に見ることのできないものをも見、感じることができたのです。古代遺跡が不明な理由によって廃墟になっているところが多々あります。北米のベサ・メルデ、Vesa MerdeのCliff Palaceと呼ばれるアナサジ、Anasaziの住居跡は、戦いの跡もなく伝染病の病死の跡も残らず、突然人々が姿を消しています。中南米のマヤ文化にも同じ事情が認められます。彼らは来るべき長年に渡る旱魃や、また巨大地震といった自然の災害を予知する能力を持っていたということです。テレビはなくても、機械によって知るのでなく鳥や虫や雲などを自然観察することによって、また自分たちの第六感によって迫り来る自然の災害を予知することができたのです。他方、私たちはその第六感を殆ど失っています。つまり機械の奴隷になっています。機械を通さなければ何もわからない。ますますその傾向は強くなっています。

第二に、古代文化を理解するためにも、また、ただ一人の古代人を理解するためにも、現代のあらゆる学問が動員されなければならないという点が挙げられます。つまり古代文化、またその中に住む古代人は、総合文化的なものです。現代の文化は、専門別の縦割り文化です。岩石に詳しい人は天文学のことを知りません。天文に詳しい人は岩石のことを知りません。しかし古代人はどうでしょう。一人の古代人をとっても、彼は天文のことをよく知っています。そして石についても、一つの石を見れば、それはどこから来た石でどのように切れば何ができるかということを知ることができるといえる人間なのです。最近レーダーを使って、木が何を言っているかを知ることができるというニュースがありました。昔の人はレーダーなど必要ではなかつ

いろいろな顔



Fig.32 モチーカ文化



Fig.33 モチーカ文化



Fig.34 モチーカ文化

たのです。木が何を求めているか、鳥や動物が何をしゃべっているか、自分の周辺の生き物の生態をよく知っていました。木を切り、草を取り、鳥を狩り、熊を狩るとき、彼らは自然の営みを傷つけないように厳しいマナーを守りながら、収穫していました。なぜなら彼らの世界観は自然崇拝でありアニミズムだったからです。

第三の特徴は文化交流が世界的な規模で行われていた時代であったということです。国境のない時代に生きた人たちは、旅行をするに際してパスポートは要りません。国境を越えるときの面倒な手続きも制限もいっさいありません。お金も持ちませんでした。彼らは自給自足の生活をしながら、旅をすることができたのです。山野を越えて旅をするときには、そこに植わっている植物から木の実を取り、根を取り、そして狩りをすることができたのです。海を渡るときには、もちろん海の魚を上手に獲ることができました。最悪の場合でも彼らはプランクトンが食べられることを知っていました。まずいプランクトンがあるそうです。それを除けばプランクトンで人間は十分に生きていけます。鯨のような巨大な魚でもプランクトンを食べてあんなに大きくなっているのです。ただ、そういった自給自足に必要な最低限の器具を携帯する必要があります。鎌とか鋸とか、スコップのようなものでしょうか。そして雨を溜めておくための壺が要りました。携帯する土器です。土器とか、鎌とか、ナイフといったものをいくつか持っていけば、世界中旅行することができたということです。そして旅先の村では歓迎してくれるのです。たまには奴隷にされることもあったらしいですが、だいたい^{まれびと}は歓迎されて「稀人(稀に来る人)」として敬われたのです。先住民の諺にも「旅人には自分の食べるものを割いても与えよ」という言い伝えがあり、その考えは世界的だったと考えてられています。そして遠くから来た珍しい訪問客のことは、人面土器として残しているのです。その良い例をペルーの首都リマにある天野博物館で発見しました。天野博物館は、天野芳太郎氏(1898～1982年)がペルーに移住して以来、長年にわたって集めた古代インカ・プレインカの遺物を展示した三階

払 込 取 扱 票

通常払込料金
加入者負担

払込金受領証

02		口座番号		百	十	万	千	百	十	番	金	千	百	十	万	千	百	十	円
※	00930	6	※	1	4	0	3	7	9		額								
加入者名	※ 古代遺跡研究所										料	特殊							
											金	取扱							

通 信 欄

下のいずれかに ㊞ をお付け下さい

賛助会員 年間 一口 ¥ 10,000
¥ 5,000

払込人住所氏名 (郵便番号) ※

(電話番号) - -)

受付局日附印

裏面の注意事項をお読みください。(郵政省)
これより下部には何も記入しないでください。

口座番号	※	00930	6	※	通常払込 料金加入 者負担			
		百	十	万	千	百	十	番
	※	1	4	0	3	7	9	
加入者名	※ 古代遺跡研究所							
金 額	千	百	十	万	千	百	十	円
	※							
払込人氏名								
料 金	特殊取扱		受付局日附印					

記載事項を訂正した場合は、その箇所に訂正印を押してください。
切り取らないで郵便局にお出しく下さい。

各票の※印欄は、払込人において記載してください。

この受領証は、郵便局で機械
処理をした場合は郵便振替の払
込みの証拠となるものですから
大切に保存してください。

ご注意

この払込書は、機械で処理し
ますので、口座番号及び金額を
記入する際は、枠内に丁寧に記
入してください。

また、本票を汚したり、折り
曲げたりしないでください。

(郵政省)

この払込取扱票の裏面には、何も記載しないでください。

出典 天野芳太郎述「ペルーの天野博物館」32～35頁



Fig.35 ナスカ文化



Fig.36 インカ文化



Fig.37 チムー文化

建てのこじんまりした博物館です。そこに展示された遺物は粒よりの名品で、天野氏の強烈な個性と視野の広さ、深い学識を示しています。中でも注目を惹いたのは二階の一隅にある人面土器でした。10体ほどの人面土器の中には明らかにアラブ人と見られるもの (Fig.32), アラビア人 (Fig.35), そしてマオイ人 (Fig.34), ヨーロッパ人 (Fig.37), 中国か日本から来たと思われる人面 (Fig.33), またアフリカの黒人の土器 (Fig.36) もあります。註¹³ これらはいずれもペルーの海岸地方で発掘されたものですが、コロンブスの来るはるか前に来た人たちで、実際にこの地をおとずれた人数のわずか一部が人面土器として残っているのです。遠くからの珍客を地元の人たちが非常に大切にすることが、分ります。しかもこれは実際に作られた人面土器のほんの一部が発掘されて、そのまた一部がここに陳列されているわけです。すなわち、コロンブスの来るはるか前にすでにペルーへ、遠くは中近東、そしてヨーロッパからもアフリカからもアジアからも、多くの旅人が訪れていたという非常に確かに証拠と考えられます。この博物館の事務局長をしている天野芳太郎氏の孫である阪根博氏は、この人面土器を「^{まれびと}稀人信仰」を示すものとして説明しています。この人面土器の存在は文化交流が非常に早くから盛んであったことを示しています。南米ペルーにアフリカやヨーロッパから人が来て、日本からも中国からも来たということは、ペルーからもまた海外へ出て行ったということでしょう。こういったなかで、縄文時代、日本人が南米へ渡ってきたとしても、決して不思議なことはありません。人面土器に類したものは、

■アンデス古代文明編年表

時期	年代	ペルー			ポリビア
		北部	中部	南部	北部
古 期	20000	先土器(アヤクチョ、チバテロス、ラウリコチャ、トケバラ)			
形 成 期	1800	原初土器、原初農耕(コトシュ、ワカ・ブリタエ)			
	900	クビスニケ チャピン			
古 典 期	B.C. 200			パ ラ マ	
	A.D. 600	モ リ カ	アレ イク	リ マ	ナ ス カ
		バチャカマ ワリ			チ ア フ ワ ノ コ
	1000				
後 古 典 期	1400	チ ム ー	カ チ ヤ ン	シ カ ヤ	
	1532	インカ			

天野博物館「プレ・インカ染織図鑑」BeeBooksより

館の事務局長をしている天野芳太郎氏の孫である阪根博氏は、この人面土器を「^{まれびと}稀人信仰」を示すものとして説明しています。この人面土器の存在は文化交流が非常に早くから盛んであったことを示しています。南米ペルーにアフリカやヨーロッパから人が来て、日本からも中国からも来たということは、ペルーからもまた海外へ出て行ったということでしょう。こういったなかで、縄文時代、日本人が南米へ渡ってきたとしても、決して不思議なことはありません。人面土器に類したものは、

チチカカ湖の南、ボリビアのラパス市の郊外にあるティアワナコ遺跡にも見るができます。この遺跡は太陽崇拝の神殿ですが、その壁に何百という人の顔がつけられています。その殆どは原型を残していませんが、ここにもさまざまな民族の顔があったのではないかと考えられます。そのティアワナコ遺跡のガイドの言うことには、ボリビアのアイマラ・インディアンの染色や織物は、チベットのそれとほとんど同一と言われるほどよく似ているので、多分この両者に交流があったのではないかと地元の考古学者が言っているということです。このような事実を探せばもっと沢山見つかると思います。

そこで私は考えたのです。人々の生活が自給自足であるということ、そして国境がないということ、これが文化交流の世界的に行われた理由だと思います。しかし、言葉が違う民族同士がどのように意志の疎通をしたのでしょうか。そこで気がついたことは、彼らは、言葉は違うけれども、共通の生活様式を持っていたということです。つまりどこへ行きましても当時は世界中の人たちが、民族や言葉の相違を超えて、ただ一つの太陽という同じ神を崇拝していたという事実です。そこでは言葉の相違は障害にならないのです。例えば音楽のようなものです。つまり自然崇拝、太陽崇拝、アニミズムなどの国境のない社会では、言葉はあまり障害になりません。どこへ行きましても太陽崇拝をいっしょに行えばいいわけです。同じ共通の生活様式があったことが、世界的な交流を容易にしたのです。現在のように国境があって、人々の考えや宗教、信条が違うということは生活様式も違うわけです。言葉が分からなくては意志が疎通が難しく、通訳が要ったり、保障が要ったり、海外旅行はそう簡単にはできるものではありません。

そこで発想の転換をしなければならないと私は考えます。つまり我々現代人は「自分たちにできないことが古代人にできたはずはない」と考えてきましたが、私はそれを逆転して「自分たちにはできない。でも古代人ならやれただろう」という発想に切り換える必要があると思うのです。

自然は崇拝すべきもの

1か月半、ペルーとエクアドルの遺跡を巡り、博物館を訪ねて土器を見て回りました。そしてその伝統的な文化に圧倒されて帰ってきました。そして先進国とはいったい何だろうと考え直したのです。私たちが先進国と言うとき、それは経済機構や政治的に民主主義かどうか、自由な選挙が行われているか、女性の権利は守られているかというようなことで判断します。しかし文化的に言って、果してそれらの国が先進国と言えるでしょうか。現在先進国と呼ばれる国々は文化的には行き詰まっています。その機械文明、物質文明の行き詰まりです。科学と開発の名において環境を破壊し、人間のみならず地球の生きとし生けるものの生命と性が危機に

瀕しています。なぜこうなったのでしょうか。何が原因でこの破壊的な結末に至ったのでしょうか。重要な問題です。ところが発展途上国と言われる南米諸国を見ると、文化的にはスペインに支配されるまで、即ち16世紀半ばまで、自然（太陽）崇拝に立脚した文化が存在していたのです。16世紀半ばまで太陽崇拝が存続したということは、注目を集めるに値します。もちろんインカ帝国は残酷な滅ぼされ方をしていました。しかしこのあとの茶話会でお見せしようと思っているサクサイワマン遺跡での「太陽の祭り」のビデオは、ペルーの人たちがスペインに支配され変貌を遂げたとはいえ、その心底には自然（太陽）崇拝の世界観を持ち続けていることを如実に示しています。彼らは、いまもその大半が農民です。自然の恵みに感謝し、そして太陽を崇拝する気持ちをお祭りに無邪気に表現しています。彼らがインカの王様は「太陽の子」だと言っていることは、御承知でしょうが、それだけではなく、「自分たちも太陽の子だよ」と無邪気に笑います。同じことを日本で言う人がいたらどうでしょうか。軍国主義か右翼か国粹主義かとして敬遠され、人格も疑われて出世の道からはずされてしまいます。ここに46億年という長い間に形成された大自然がまず存在し、そのごく最後の部分にごま粒のような人間が発生し、そして自然の恵みによって今日まで生きながらえてきたのです。ですから、その大自然の偉大なる力を人間は意識し、自然を崇拝してきたのです。しかしいつの間にか自然は崇拝すべきものから、人間の利益によって征服したり利用し開発するものへ置き換えられてきました。今では破壊した自然を人間の力で修復できるかのような錯覚を持っています。特に日本とヨーロッパ諸国ではその現象が顕著に見られます。

文化の歴史的連続性

現代のヨーロッパ文化には古代の自然崇拝を引き継ぐものは残っていません。その理由はキリスト教および回教といった「宗教」の発生・発展にあります。例えばキリスト教に例をとりますと、キリスト教は、ローマ帝国がヨーロッパ全土を征服したとき、それまで存在した自然（太陽）崇拝を排除し、キリスト教化を推し進めたのです。これ以後ヨーロッパではキリスト教文化の花が開き、そして隣接する回教文化と対立することになります。こうして自然崇拝から離れてしまったことにより、ヨーロッパ人の自然に対する考えは変わります。自然と人間を対立させ、人間は自然を征服するものと考えようになったのです。

このことに関して南米の未開社会の研究をしたフランスの人類学者クロード・レヴィ＝ストロース、Claude Levi-Strauss、は、日本の印象を次のように語っています。

「私が人類学者として大変感動したのは、もっとも現代的な面を持つ日本が、一方ではそれから最も遠い、つまり自分たちの根源と切り離されることがないということです。それに対して私たちは自分たちの根源が存在することを知ってはいても、そこに立ち返ることは非常に難

しい。私たちとその根源との間には超えることのできない溝があり、こちら側からはそれを眺めるという以上のことはできない。ところが日本は根源的な過去との連続性、あるいは結びつきがあります。それは永久的なものではないかもしれませんが、少なくとも今は存在しています」。^{註④}

私は、彼の鋭い洞察に深く共鳴するものです。ヨーロッパ人には根源との間に断絶があって、それを川の向こうに眺めることはできるが、それと結びつくことはできないと彼は言っています。何が根源との断絶を作ったのでしょうか。それを私は「宗教」すなわち、ヨーロッパにおいてはキリスト教だったと考えるのです。

ところで、宗教と古代の自然（太陽）崇拝とは、どこが異なるのでしょうか。宗教とは、まず教祖をもち、一定の教典をもっています。多くの場合、信者の獲得のために組織と教会をもち、外へむかっては異教に対して、内に向かっては異端にたいして、高度の排他性をもっています。野にあって反（非）権力的であった原始（初代）キリスト教は、教会も組織も持たず、ローマの支配と搾取に喘ぐ人々に救いの手を伸ばしていました。しかしコンスタンチヌス帝によってローマ帝国の国教の位置におかれるや次第に政治権力と結合して「権力の思想」となり支配者の宗教として生まれ変わるのです。終戦前の国家神道、中世ヨーロッパのカソリック、北米にみる黒人支配の白人キリスト教などこの例に洩れません。その点、古代の自然崇拝には教祖も教典もありません。いかに卓越していたといえ教祖は人間です。教典も人間の作ったもの、否、宗教そのものが人間の作ったものです。人間の作ったものには限界があります。しかし古代の自然崇拝には、大自然の生成発展の法則があるのみです。太陽も月も雷も風も木も虫も魚も、この地球も大自然での一部であり、すべて自然の法則に則って生を営んでいます。かつては人間も同じでした。縄文土器のあの創造力の豊かさは、大自然の無限性にに基づいています。古代における政治が国家におけるそれと相違する点もここにあります。キリスト教や仏教、回教を宗教と呼ぶならば、古代の自然（太陽）崇拝は、むしろ、生活様式、way of life と言うべきでしょう。

さて日本はどうでしょうか。ストロース氏は磐座についてはご存じないのではないかと思います。この次来られたら、ぜひとも磐座にご案内したいと思います。日本には確かに古代から文化の歴史的連続性があります。いま8~10万と言われる神社の存在がそれです。その神社に祀られている神の大部分は、いまも太陽神とか雷の神とか、風の神であるとか、縄文の昔の自然（太陽）崇拝の神々なのです。

まだ東京にいたときのことですが、あるとき思いついたのです。世界平和を祈願するのに最も相応しいのは神社ではないだろうか。古代人は地上に生きるものすべてに自然の恵みが豊かであるように祈ったのです。そしてそれをずっと引き継いでいる神社は、地球平和を祈願するのに最も相応しいと思ったのです。

東京の周辺には立派な神社が沢山あります。千葉県鹿島神社。ここには武甕槌神すなわち雷の神が祀ってあります。原始林が残っていて古代さながらの森厳でいかめしい神社です。近くには香取神社、ここには風の神である経津主神が祀られていて、神社は桜で取り巻かれ風が吹くと花吹雪に包まれます。剣岩のところで申し上げたように、古事記のなかでの雷と風はいつも一対で悪魔を払う祓いの神なのです。

鹿島神宮の社務所で3000円を払い、「世界平和を祈願したい」と申しました。巫女たちは顔を見合わせて奥に消えてしまいました。しばらくして神官らしい人が出てきてこういうのです。「世界平和という祝詞はございません。安産とか安全運転ではいかがでしょうか。」「それは困ります。私は世界平和を祈願しに来たのですから、世界平和でなくては困ります」。彼も奥へ消えていきました。暫くして今度はもっと偉い神官が出てきました。そしてこう言います。「実は、世界平和を祈願する祝詞はありません。恐縮ですがあなたがご自分で言うだけでいいでしょうか」「結構です。私が言いましょ。その代わりに、太鼓を叩いてくださいよ、お祓いもして、玉串も奉典しますよ」「はい、結構です」。そこで、腹にしみ込むような大太鼓、それにも増して大きな声で——祝詞調とはいきませんが、——世界平和を祈願したのです。

平和祈願の祝詞が無いということは、神社に平和祈願をお願いする人がいないということです。では人々は神社で何を祈願しているのでしょうか。もともと日本人は複数の宗教をいろいろに使い分けて生活しています。仏教でありながら神社にお参りする。神道でありながら死ねばお寺の墓地に葬られる。またクリスマス・クリスチャンや最近では結婚式クリスチャンが多いが彼らはクリスチャンではないなど、外国人の眼からみると異様な宗教行為です。その異様な宗教行為を分析しますと、生命の誕生、成育、に関しては仏教徒といえども神社に祈願をこめる。安産祈願にお経をあげてもらおうという話は余り聞かない。生命の誕生・成育に関しては、仏ではなくて、天地の神々に祈願をこめるという行為は、仏教が入る以前からの習慣で、それは生活様式であり、社会習慣となっている。この点には歴史的連続性が見られます。しかし古代人との大きな違いは、古代人は現代人のように、my money, my business, my family, my car と、個人の私有財産の安泰と増大を祈願するのではなくて、地上のすべての生き物に自然のめぐみの豊かなることを祈ったということで、この点では、神社のあり方も人々の祈りの内容も全く変わってしまっていて、歴史的連続性は形式にのみ留まっていると言えましょう。

研究への抱負

最後に、これからの抱負について申し上げます。以上の理由によりまして、私のこれからの仕事は、磐座の調査と保護なのですが、この仕事の難しさは次の点にあります。ひとつは、磐座には一定の見方がある、それ以外の見方をすると、それは磐座を侮辱し、穢れをつけるこ

とになるということです。それではその一定の見方とは何かですが、それは磐座を構築した人々の世界観なのです。何故ここにこの岩があるのか、何を意味しているのか、それを知るためには、古事記を読まなくてはなりません。次には古事記をどう読むのか、が問題です。現在のよりに各自が自分勝手な思いつきや想像を発表してその多様性を楽しむということでは磐座を侮辱することになるのです。有名な小説家が磐座をUFOの発着地だと言い人気を高めました。また遠くの星と交信していると言う人たちも交信と関係のある聖地だと言い、ある人たちは、癒^いしの地だといっています。マチュピチュには世界の各地から毎日何百何千人の人が訪れますが、そのなかにパワーを貰いにきている人が多いのに驚きました。日時計の岩の上に指輪やネックレスを載せてパワーを貰おうとする若者が大勢いました。色が変わるそうです。でも最近パワーが少なくなったから早朝に出直さなくてはと言う人もいます。遺跡の方々が人が輪になって座り瞑想しています。パワーを貰いたいのだそうです。どうして現代人はこうも物欲し気になったのかと驚くばかりです。最高の警戒を要するのはジャーナリズムです。人々の好奇心をあおり立てるような記事は面白くて売れるでしょうが、そのために大切な磐座に真っ赤なスプレーがかけられたり、岩絵がはぎ取られたり、自分の名や「南無阿弥陀仏」が書かれたりします。その記事を読んだ人が、古代人に対する敬意、その偉業にたいする畏敬の念を起こさせる記事であることを私は取材の条件にしています。何故ここにこのような祭場が作られたのだろうか、その目的、その世界観に敬意を表しながら古代人の偉業を見せて頂き、それをそのようなものとして尊び、復元・保存する。これが磐座を訪れる者の基本姿勢であるべきと思うのです。

古事記は古代人の自然（太陽）崇拝の世界観を示した数少ない文献の一つです。しかしこれをどう読むかが問題です。この点に関して磐座の存在を実地に立証した古事記研究家・荒深道斎（1870-1949）は、古事記の解釈が間違った理由は、これが編纂された時に太安万侶が漢学者であったために漢字にしてしまったからだと説明します。つまり古事記に残されている思想は、仏教や漢字の到来以前の思想であるので、正しく解釈するためには、漢字をすべて排除して、もとの日本語の意味によって解釈し直さねばならないということです。例えば、古事記の冒頭は次の文で始まっています。「天地初発之時…」。これは「あめつち はじめて ひらかるのとき」と読むべきです。これを漢字の意味で解釈すると、「地」は地球ですから「天」は、「地球の上の空」と言うことになります。ところが、これを、もとの日本語の意味によって解釈すると、まず、「あ」とは何か、何故「あ」が「あめ」になり、次に「つ」になり「ち」になるのか、を知らなくてはならないのです。註⑤ 詳述する時間がありませんので、結論を申し上げますと、この一文の意味するところは、大宇宙の始まりを意味しているのです。このあと古事記は宇宙の生成発展から地球の成り立ち、地上の生物の進化そして人類の発生を説いています。磐座を作った時代の人の世界観は、当時は世界共通のもので、これよりはるか後世に生ま

れた国家とは無縁のものです。歴史の国家段階に位置する現在、物質文明が行き詰まり、科学と開発の名において自然を大量に破壊してしまった現在、何故こうなったのかを理解し、どうしたら良いのかを考えるために、縄文またはそれ以前の人たちの思想を知ることは大切です。自然を修復するようなことは、もはや現代人には不可能です。いま必要なことは、自然を崇拜する心をいかにして取り戻すか、ではないでしょうか。

私は、いま、磐座・磐境の研究を専門とする研究所の設立を必要と考えております。幸い、昨年国会で非営利活動法が成立しましたので、できるだけ早い時期に、これに申請し、特定非営利活動法人古代遺跡研究所を設立して、今後の活動を進めてゆきたいと思っております。註⑩
ご静聴を感謝いたします。

(1998年12月4日)

〔註〕

- ① 「女子学生は何を考えているか — 同志社大学女子学生の実態調査」(1954年), 同志大学婦人問題研究会調査編集, 同志社大学研究所発行
- ② 高橋 徹 (1930-1997), 大東文化大学教授, 黒人文学者, 訳書に S. ニアリング「ブラック・アメリカ」など多数。
- ③ この運動については拙著「黒人の政治参加と第三世紀アメリカの出発」中央大学出版部, 1989の終章「日本人とアメリカ黒人」を参照
- ④ 磐座について, 神道大辞典では「岩石における神祇奉祭の座」。神道辞典では「そこに神を招いて祭をした岩石」とある。磐境については, 神道大辞典では「神を祀るために 磐石をもって築きめぐらしたる場所」とある
- ⑤ ここに紹介する磐座のうち(1)(2)と(9)以外は, 古事記研究家・荒深道斉 (1870-1949) によって探査されている。磐座・磐境についての探査とスケッチを含めた同氏の著書「八咫の鏡」と「天孫古跡探査要決」は八幡書店発行「古神道秘訣」に収録されている。しかし(2)の九州山地主峰・国見岳の神籬については, 著書「草薙剣」で理論的考察が成されているが, その磐座についての現地の踏査は行われていない。
- ⑥ Museo Amano "MACHU-PICCHU", 天野博物館発行。住所は Celle Retino 160. Miraflores, Lima, Peru
- ⑦ 中西 旭著「国見岳の磐座についての所見」, 国見岳の神籬保存会, 1987, p. 3
- ⑧ 中西 旭, 上掲論文, p. 3
ニギミタマ・アラミタマに関しては神道大辞典で下記のように説明している。
「古代人の神霊観の一つで, 神霊の作用を二大別して和魂と荒魂となす。和魂は平和慈愛の徳, 荒魂とは勇猛進取の作用をいう。前者は静止的, 調節的で常の状態にあるを指し, 後者は常の状態より脱出したる活動的状态を意味する。平素は一神格に統一されていたが, 場合によっては分離して単独に一個の神格者として働くものとせられた。(要約)」
- ⑨ 中島 和子, 「古代における政治と祀り(Ⅰ) — 九州山地の主峰・国見岳祭祀遺跡の社殿跡地の発掘調査報告」, 「京都精華大学紀要」第7号, 京都精華大学
- ⑩ Evans, Clifford, Betty Meggers & Emilio Estrada, Early Formative Period of Coastal Ecuador, the Valdivia and Machalilla Phases, Smithsonian Institution U. S. National Museum, Washington, U.S.A 1965
- ⑪ * Dr. Adatao Arajo (井上アメリカ訳) 「調査の概略 — 1991年」アメリカ大陸人類研究所の冊子。* 影井昇「Rock Art: 太平洋を渡ったモンゴロイド — コウチュウ感染から見る人の移動」, 「アニメ」1991年10月号, 平凡社。* 古田武彦「海の古代史」原書房, p. 6, & pp. 67-69.
- ⑫ 拙著「古代における政治と祀り(Ⅱ) — 北米ユタ州ピリングス土偶と古代先住民フレモント(1)」, 「京都精華大学紀要」第12号, pp. 3-5, 京都精華大学
- ⑬ 天野芳太郎述「バルーの天野博物館 — 古代アンデス文化案内」pp. 32-35
- ⑭ Claude Lévi-Strauss「日本文化について」, TV NHK教育放送, 平成5年4月15日
- ⑮ 荒深道斉著「総合古事記純正読本」, pp. 187-210, 道ひらき発行
- ⑯ 1999年7月14日 兵庫県庁より特定非営利活動法人・古代遺跡研究所の認可を得る。